

向学館通信

2005・08・27

お知らせ

8月の漢字検定試験は、皆さん、よくがんばりました。

9月21日～23日は連休にさせていただきます。

夏休みの「作文」「感想文」に悩む

8月の末に「宿題は終わったの？」と聞くと、読書感想文だけが残っている、という答えがかえってくる人が多いです。子供のほうは「嫌なこと」だから後回しにしています。

さて、この「読書感想文」について、保護者のみなさんの考え方には、他の科目の勉強とちがって大きな差異があるように思いました。うちの子は作文が苦手だから、夏休みの始めから本を何冊も読ませて準備をさせよう、といった対策を積極的にとられた親御さんがおられます。他方、夏休みの終わりになって、「どうにかして、片づければいい」ぐらいにしか考えていない方も（この方が多いのですが）おられます。

算数（数学）などの宿題では、ほとんどの親御さんの態度はそんなに変わりはありません。なぜ、読書感想文ではこんなに対応に差があるのかと、不思議な気がしています。

この夏も、何人もの生徒の読書感想文を指導しました。いろんなケースがあります。いちばん手を焼くのは、本を読んでも、その本の内容を話せない（つまり、しっかりと内容が把握できていない）ケースです。読解力がないわけですが、当然、「感想」があるわけではありません。聞いても「おもしろかった」ぐらいしか言えないのです。これでは、感想文になりません。文章の内容の理解とそれを人に話せるようにすること（表現力）が、まず最初に克服しなければならないこととなります。そこから、書けない文を書かせるのは難しいことです。

また、別のケースでは、選んだ本はいいし、感想もある程度もっているのですが、文にまとめる「構想」がまったく立たないという人や、文章もかなり書けるのですが、なんとなく「だらだらした文」で起承転結などがはっきりしていない、という人もいます。いろいろです。

なぜ、作文の練習が役に立つのか？

このように、生徒の力量からいっても、数学（算数）などの力の差より、はるかに大きな力の差がついているのが、この分野（作文・論文）の勉強です。ところが、作文は直接「点にむすびつかない」のが実情です。国語の試験に作文が出るのではないので、作文が上手になっても大してトクをしな、とと思っているのかもしれませんが。他方で、文章を書くことは大事な勉強だと思っている親御さんがおられます。

ここでもう一度、作文や論文の意義を考えてみたいと思います。

高校生の学力を見ると、小・中よりもっと明確に、国語力の弱さが他のほとんどの科目が伸びない理由になっていることがわかります。小・中レベルでは、まだ数学や理科・社会も暗記でかなりカバーできるところがあります。しかし、高校レベルでは、論理的な理解力や推理する力がないとわからないことが多くなります。国語力が十分であれば自分で辞書を引いたり、参考書を見たりして勉強できます。だが、国語力が弱いと、いくら論理的に説明しても、分かってもらえないことが多くなります。

だから、小さいときから読書感想文を書くことが大切だと思います。文を書くことは、まず、書く前に何冊かの本を読まなければならないこと、読解力がなければ感想ももてないので、長い文を読んで頭のなかでそのストーリーを反復する必要があること、一定の長さの文にまとめあげるには、理解力も表現力も構想力も独創力もいること、こういう能力を鍛えることが、論理過程の長い、複雑な問題をこなしていくためのいい準備活動になるだろう、といったことが理由です。

こうした能力を鍛えるのに、いまの国語教育が十分な役割を果たしているとはいえないと思っています。生徒によっては国語も「覚える」ことが中心の学科になっており、これではとても論理的な理解力や分析力などは育ちません。こうした能力を伸ばすのに、会話や文章においてきちんと表現していくことは有効だと考えています。